



感動の竹馬披露会

1月の年長さんは、竹馬乗りの「動」と茶話会の「静」という大きな変化を見事に乗り越えることができました。

10月末に、保護者の皆さんと一緒に作った世界で一つの竹馬から練習が始まり、21日の竹馬披露会をもって今年度の竹馬乗りの活動に終止符を打ちました。

今年度の年長さんは、私の見た3年間では、一番上達が早かったように思われます。竹馬披露会は、毎年のように、台本のないストーリーが展開されます。

子どもたちの最後まであきらめない姿を見て、誰一人として感動しない人はいなかったと思います。この感動も、日頃の練習振りを見ているからこそ、一人ひとりの目標を達成する姿が、感動を呼ぶのでしょう。

この披露会を迎えるまでの子どもたちの日々の努力は、感心するばかりです。晴れて暖かい日ばかりではありません。粉雪交じりの日もあれば、氷雨の日もあります。そんな時でも、担任の励ましの声に勇気づけられ、子どもたちは、ベランダを往復します。足の指先が真っ赤になっても、黙々と練習に打ち込みます。

こんな時、担任は、温かいお湯をタライいっぱい準備して応援します。子どもたちは、ちょっとした足湯で冷えた指先を温め、再び、練習を開始します。ある程度の実力が身に付いてくると、ベランダの階段の昇り降りが認められ、子どもたちは、次々と挑戦し、ほぼ全員がクリアしていきました。

当日、子どもたちは、大勢の前でこれまでの練習の成果を披露するため、緊張しつつも、真剣な顔つきが見られました。練習の時には見せなかった動きにやや硬さがあり、スタートの空中乗りで数人が上手くいきませんでした。乗ってしまえば、ゴールまでスイスイでした。空中乗りの高度な技術が必要です。足載せ台の高さは、1段目の節で約30cm、2段目の節で約60cmありますから、子どもの腰の高さ以上あります。バランスを取って乗るのは至難の業です。いろいろな技を披露した子どもたちの顔には、やり遂げたという満足感が溢れていました。



静寂の茶話会

竹馬乗りの「動」に対して、27日は「わび、さび」の世界「静」の茶話会でした。これも本園の伝統行事として長年受け継がれてきています。子どもたちに、少しでも幽玄の世界を体験させたいということからです。中学校・高校や大学に、文化財指定級の立派な茶室があるのをご存知でしょうか。こうしたところからも、園児に、茶道の体験をとということが生まれてきたのかもしれない。

茶話会に対する担任の指導が行き届き、誰一人として一言もおしゃべりをする人がいません。遊戯室は、波を打ったような静けさです。日頃、賑やかな子どもたちも、この日、この瞬間は、「静」を長い時間保つことができました。

お母様方から運ばれてきたお菓子を口にするときでも、何口で食べたらいいのか迷っていたのでしょうか。普段であれば、隣の子に「どうすると？」と聞けるのに、この日ばかりは話ができないため、周りをキョロキョロ。最後に残ったお茶の泡をどう処理するとよいのか苦戦する子もいました。その子が飲み干すまで横目で見ながらも、じっと、そして、静かに待つことができました。こうした光景は、なかなか見れないだけに、いい絵になりました。

手伝いのお母様方の多くは、お菓子やお茶の提供初めて経験されるため、子ども以上に緊張しておられたようです。また、どのタイミングでお辞儀したり、お菓子を提供したりするといいのか迷われたクラスのお母様方は、子どもが入室する前に、一度、やり方を練習して臨まれました。

静けさが緊張を高める中、子どもたちは、自分の母親が目のお世話してくれると分かれると、急に笑顔を見せ、安堵した顔になっていました。

当日、茶の指導者に、この道25年というゆり組の保護者の都地様をお迎えしました。男性によるお茶の点て方は、所作に切れがあり、女性の優雅さとは違ったよさを感じられました。子どもたちも、茶筌でお茶を点てられる都地様を見て、「ウワ、はや

〜い」と驚いていました。お父さんの姿勢やお茶を点てる所作を初めて見た都地君は、真剣な眼差しで見つめていました。感想を求めると、「お父さん、かっこよかった」と言葉少ない中に、父親に対する尊敬の念を感じられました。